



3
万年
前
福
知
山
京
丹
後
に
狩
人
が
い
た

福知山市 稚児野遺跡

京都最古の狩人たち

後期旧石器時代前半の遺跡を中心に

京丹後市 上野遺跡



第147回埋蔵文化財セミナー

「京都最古の狩人たち ―後期旧石器時代前半の遺跡を中心に―」

日 程

- 13時30分 開会あいさつ
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター事務局長
阿部篤士
- 趣旨説明 筒井崇史
- 13時40分 講演 「後期旧石器時代前半の日本列島」
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
中川 和哉
- 14時30分 休憩
- 14時40分 報告1 「海を臨む遺跡 京丹後市上野遺跡の発掘調査」
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
面 将道
- 15時10分 報告2 「台地の遺跡 福知山市稚児野遺跡の発掘調査」
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
黒坪 一樹
- 15時50分 休憩
- 16時 座談会 京都府の3万年前を考える
中川和哉、黒坪一樹、面 将道
- 16時30分 閉会

- 主 催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 共 催 福知山市教育委員会
- 会 場 ハピネスふくちやま市民ホール

後期旧石器時代前半の日本列島

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
中川和哉

1. 旧石器時代ってどんな時代？

旧石器時代は人類がアフリカで初めて道具を使い始めた330万年前から始まります。旧石器時代の終わりは地域によって異なっていますが、日本列島では1万6千年前に土器を使用するようになって縄文時代に移行します。最初的人类は180万年前頃にアフリカを出発し、中近東地域を経てヨーロッパやアジアに広がりました。その時の人類は、原人(ホモ・エレクトラス)と呼ばれる人類で、大きな^{れき}礫から作られたハンドアックスなどの石器を用いていました。アジアではジャワ原人や北京原人が代表例です。各地に広がって住んでいた原人たちは、住んでいた場所でそれぞれが進化し、ネアンデルタル人やデニソワ人などの



第1図 グレートジャーニー (C.J.Bae et al 2017を改変)

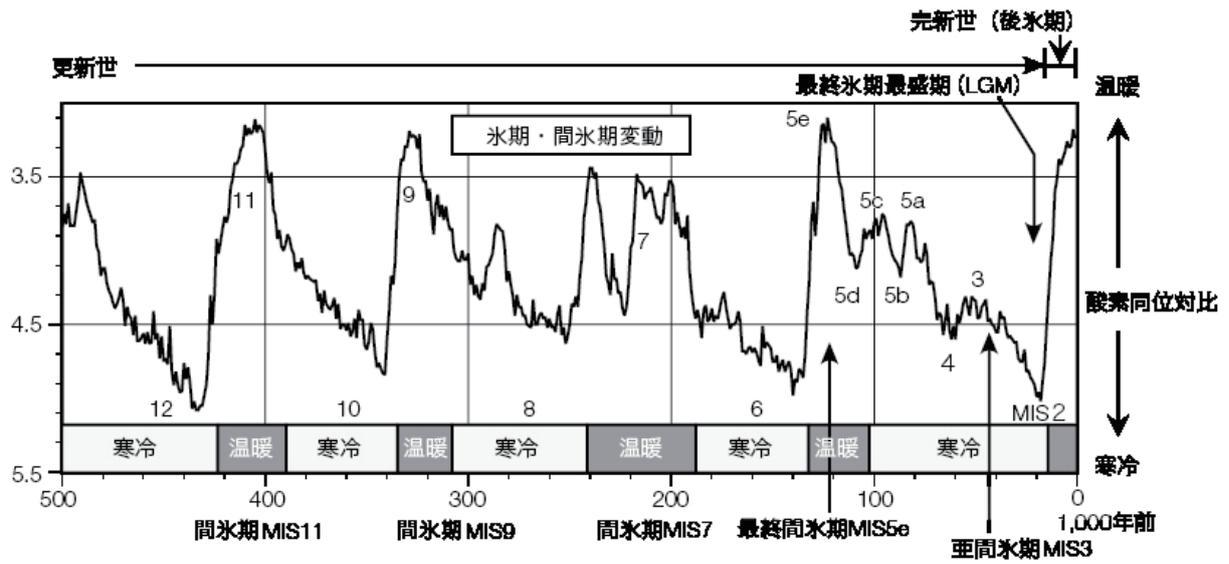
古代型新人(旧人)になりました。彼らは積極的に狩りをして動物を獲得していました。

こうした古代型新人の多くは3万年以上前に地上からいなくなりました。それでは我々はいったいどうして今生きているのでしょうか？一昔前は、それぞれの地域で古代型新人たちが、我々現生人類(ホモ・サピエンス)になったと考えられていました。しかし、近年の遺伝子研究の進歩によって、過去の人類史を復元することが可能になりました。現生人類は30~20万年前にアフリカの残った原人の子孫たちから進化しました。現生人類は6万年以上前にアフリカを出て、ヨーロッパやアジア、オーストラリアに広がり、やがてベーリング海峡を越え南米にまで至ります。この壮大な旅はグレートジャーニーと呼ばれています。日本のある極東アジアには、5~4万年前に現生人類は現れます。現生人類(以後後期旧石器人)が暮らし始めた時期から縄文時代が始まるまでを後期旧石器時代と呼んでいます。後期旧石器時代の遺跡は日本列島で約3万8千年前に出現しますが、気候の変化する3万年前を境に、3万年以前を前半期、以後を後半期と位置付けています。

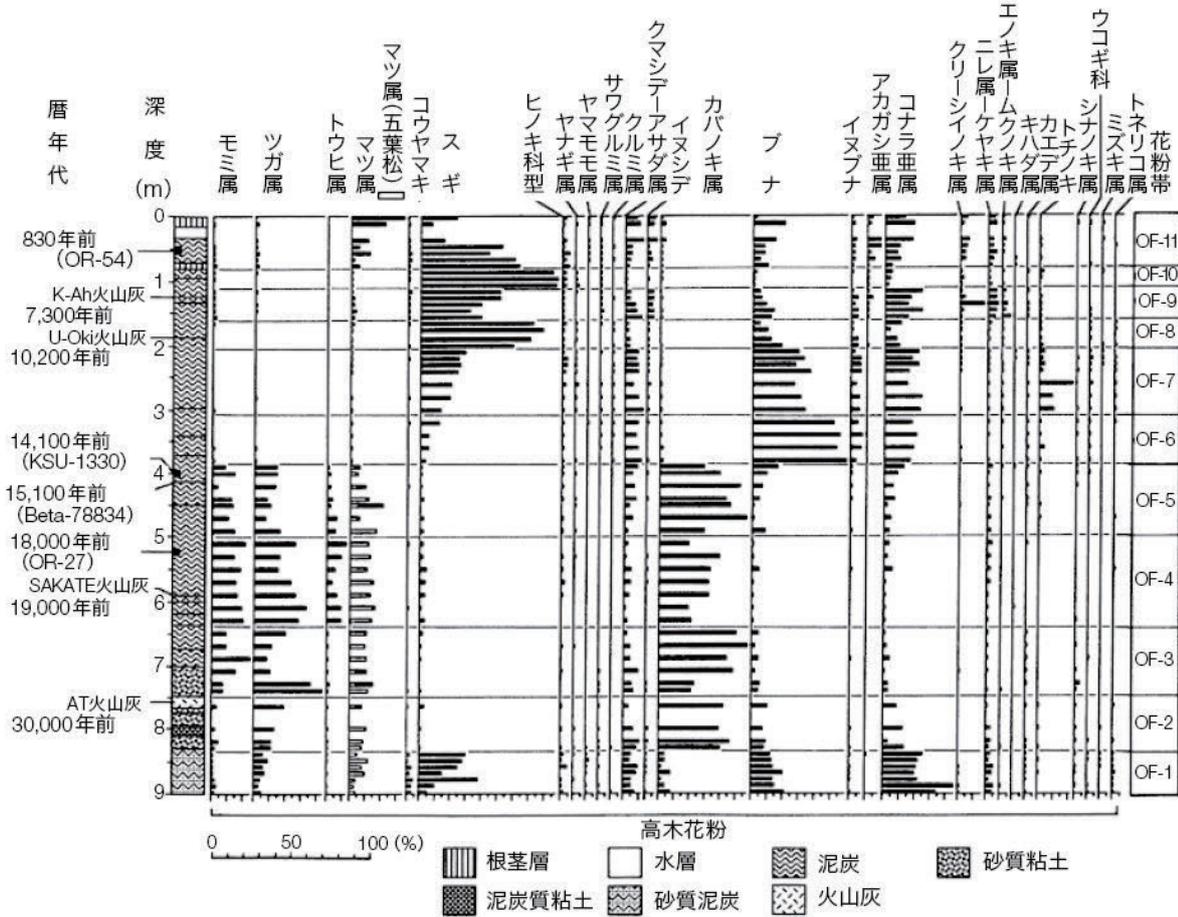
2. 後期旧石器時代前半期はどんな時代？

後期旧石器時代前半期は約7万年前に始まった氷河期がやや温暖になった時期にあたります。温暖といっても現在よりは寒冷で、海水面が60~80m程度低かったことが分かっています。3万年前以後には急激に寒冷化が進みます。どうしてこのようなことが分かるのでしょうか？海の底に堆積した地層をボーリングして、そこに含まれる2種類の酸素(酸素16と酸素18)の比率を調べ、その変化によって気候を復元します。蒸発しやすい酸素16が雲になり、雨や雪となって地上に降り、やがて寒い気候下で雪や氷として陸上に多く残されれば、海水の酸素18の濃度が濃くなるという現象を利用しています。これによって地球では寒冷期と温暖期が繰り返されていることが分かりました。検出された地層に現代から順に番号を振ったものを海洋同位体ステージ(MIS)と呼んでおり、奇数が温暖期、偶数が寒冷期にあたります。後期旧石器時代前半はMIS3(6~3万年前)にあたります。

それでは京都府ではどんな気候だったのでしょうか？かつて湖だった南丹市の神吉盆地や宮津市の大フケ湿原の堆積物に含まれる花粉の分析によって当時の環境が復元されています。内陸部の神吉盆地では、MIS4(7~6万年前)にはツガ属、トウヒ属、マツ属などのマツ科針葉樹林が発達していましたが、MIS3になるとヒノキ科の樹木が多い温帯針葉樹林を形成していました。続くMIS2(3万~1万6千年前)には再びマツ科針葉樹林が発達します。日本海側の大フケ湿地でも同じような傾向がみられますが、MIS3の時期にはヒノキ科とは異なるスギが多くなります。京都府北部の後期旧石器前半の人々はスギやブナ、どんぐりの実るコナラ類の林に囲まれて生活していたと考えられます。縄文時代には



第2図 過去50万年間の氷期・間氷期変動(高原 2011)



第3図 大フケ湿地の地層に残された過去の環境変化(高原2015)

実線は最終氷期最寒冷期の海岸線
動物の縮尺不同



第4図 旧石器時代に生息した動物たち
(旧石器考古学辞典から引用)



第5図 向日市殿長遺跡の旧石器時代の
大型獣の足跡

どんぐりをあく抜きして食用としていましたが、旧石器時代に食用としていたかは明確な証拠がありません。

それでは、この時代にはどのような動物が住んでいたのでしょうか？MIS3の時期には、現在は絶滅しているか、違う地域に移動してしまった動物も住んでいました。肩までの高さが3mを超え、2m以上の牙を持っていたナウマンゾウや肩までの高さが1.8mのヤベオ

オツノジカ、バッファロー、原牛などの大型の草食獣や、現在は北海道にしか住んでいないヒグマが本州に住んでおり、肉食獣のヒョウやオオカミも生息していました。大型の草食動物は後期旧石器人の狩猟対象となっていたと考えられます。

3. 日本列島への人類の移住

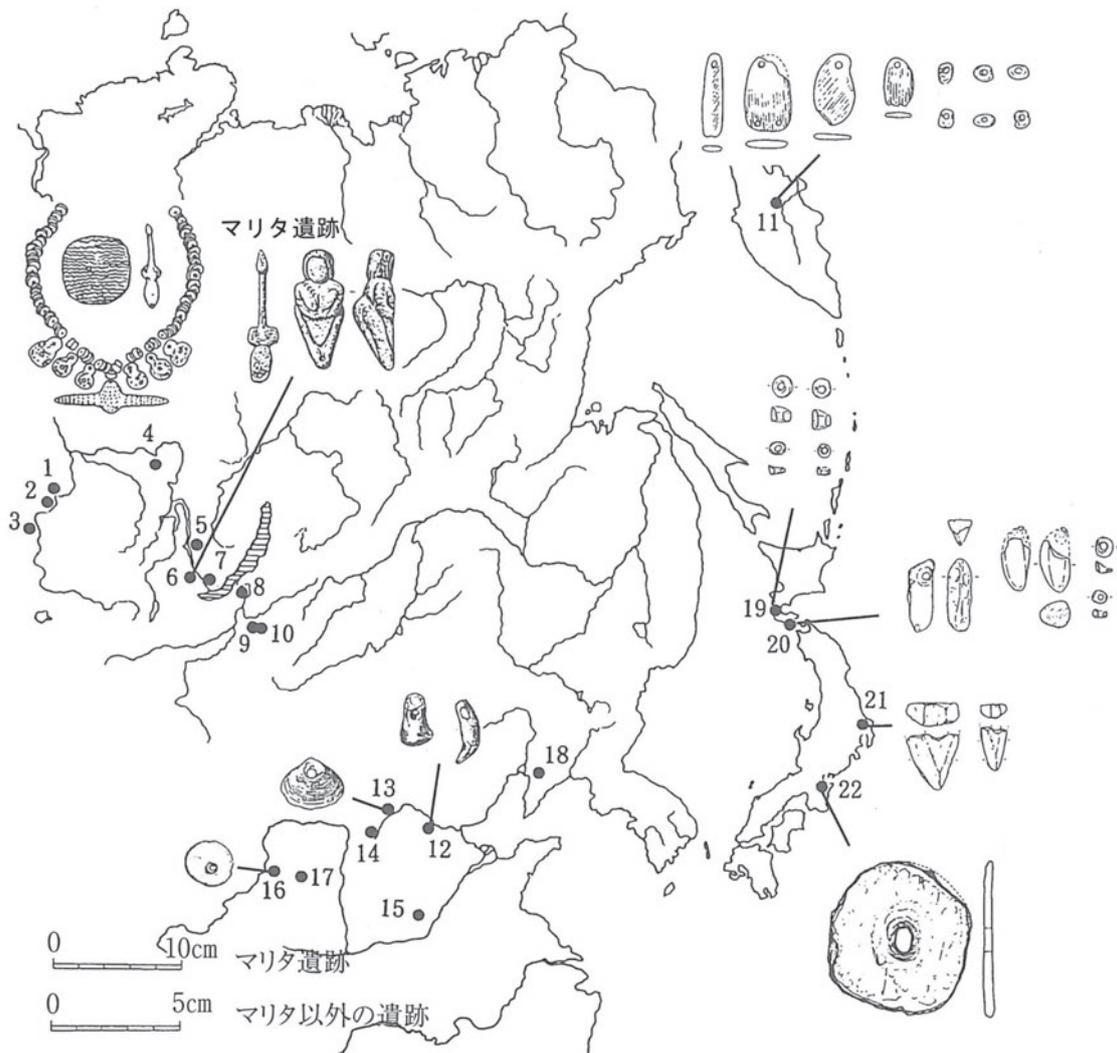
人々(現生人類)はどこから日本列島にやってきたのでしょうか？日本列島には第6図に示したように樺太から北海道に至る北海道ルート、朝鮮半島から九州に至る対馬ルート、台湾から島沿いに南九州に至る沖縄ルートの3ルートが最も日本列島への移住の可能性がある経路と考えられています(第6図)。MIS3の時期は現在よりは寒冷で海水面も低下していましたが、北海道ルート以外は大陸とは繋がっていませんでした。しかしながら、地続きだった北海道では3万年より古い遺跡が発見されていないことから、3万年以前に人々がやってきたルートとしては可能性が低いと考えられています。



第6図 日本列島への移住ルートと後期旧石器時代前半期の石器

沖縄の山下町第1洞窟からは3万6千年前の人骨が出土しており、沖縄まで後期旧石器人が来ていたことが分かっています。石器にはものをすり潰したりたたいたりする敲き石や礫器れっきがあるとされていますが、同時期の九州の石器とは異なった構成をもっていることから、直接の関連性は薄いと考えられ、東南アジアなどの南方の影響を受けたと考える人もいます。

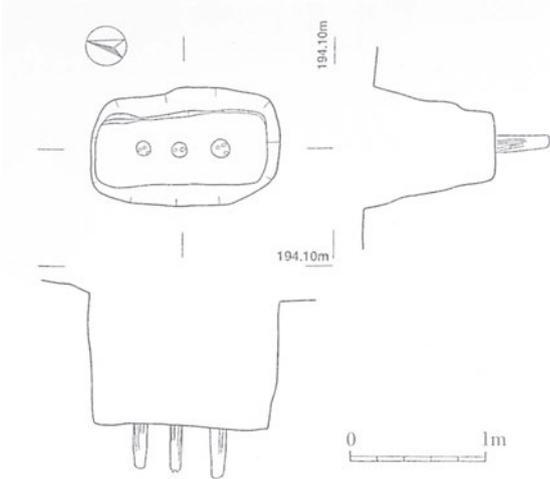
残る対馬ルートが後期旧石器人の最初の移動ルートの可能性が高いですが、朝鮮半島では4万2千年前には後期旧石器時代の遺跡があり、極東アジアでは最古の後期旧石器時代遺跡と位置付けられます。研究の進んでいる韓国においても、日本と同様に後期旧石器時代前半期の石器文化の様相はまだ確定していません。日本との類似点もありますが韓国と



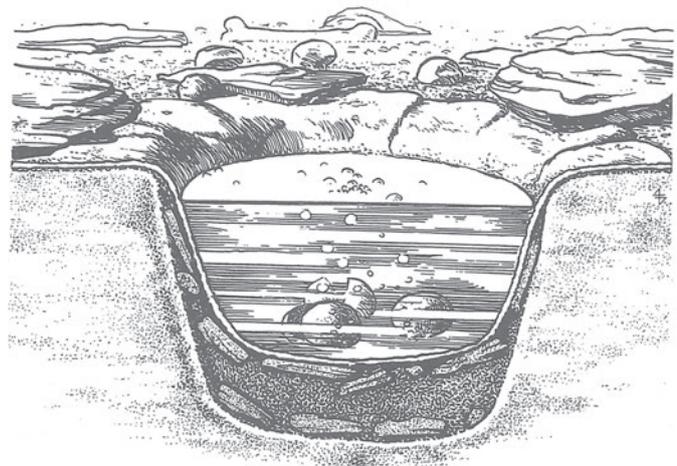
第7図 シベリア・東アジアの装身具出土遺跡(松藤2010)

日本は同じ文化様相ではありません。当時の人々も環境や狩猟対象に合わせて使う道具も変えていたと考えられます。基本とする技術を持っていれば道具の形を変え適応していたのでしょ

沖縄ルートや対馬ルートについては、海によって日本列島が大陸から隔てられていることから、当時の人々が船や筏など何らかの渡海手段を持って海を渡っていたことを考える必要があります。オーストラリア大陸では6万年前に海を渡って移住したことが分かっています。また、関東地方の人々は石器に用いる黒曜石を得るために遠く伊豆諸島まで海を渡っていたことも明らかになっています。当時の人々にとって海を渡ることは日常だったのかもしれない。



第8図 鹿児島県仁田尾遺跡の落とし穴
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2008)



第9図 焼石を用いた煮炊き
(G.ボジンスキー/小野訳1991)

4. 旧石器人たちの生活

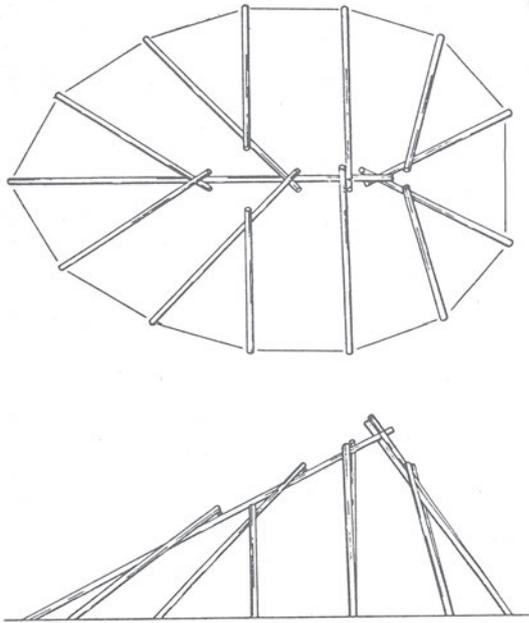
① 衣(装い)

日本列島の多くの地域では土壌が酸性であるため、植物や動物などの有機質で作られた道具は長い時間を経て朽ち果て、ほとんど見つかりません。そのため当時の装いを復元することはできませんが、同時代の外国の事例から推測することができます。ヨーロッパでは貝や骨、卵の殻でできたビーズをなめした皮などでできた服に縫い付けて模様を描いたり、帽子に多くのビーズが縫い付けられた状態で出土したりします。日本では、後期旧石器時代後半期の沖縄県サキタリ遺跡から貝製のビーズが出土しています。石製のものは北海道や東北地域で出土しています。また、赤い色を付ける赤鉄鉱などの赤色顔料が出土することもあり、服や体を赤色に染めていたものと考えられます。

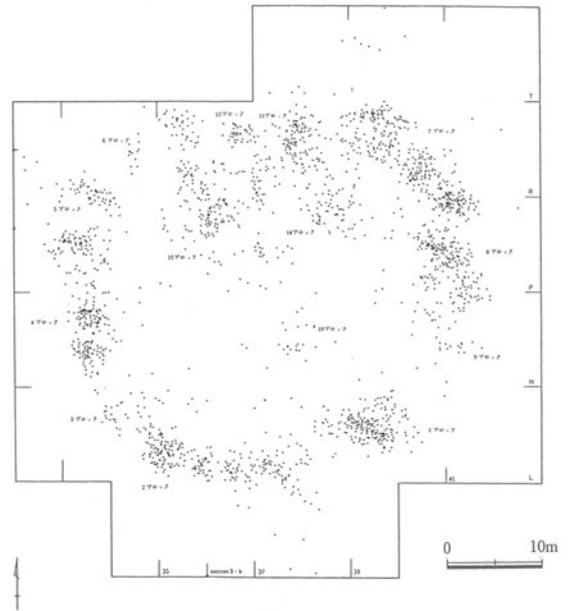
② 食

後期旧石器時代人は、食料を得るために槍などで積極的に獣を狩ること以外に、集団で獲物(大型動物)を追いかけ、列状に配置された落とし穴に追い込む罠わななども行いました。サキタリ洞遺跡では貝でできた釣り針が出土しており、釣りも行われていたと考えられます。しかしながら、民族例などから推測すると人間が必要とする栄養の多くを小動物の捕獲や木の実や根菜の採集によっていたことも想像に難くありません。

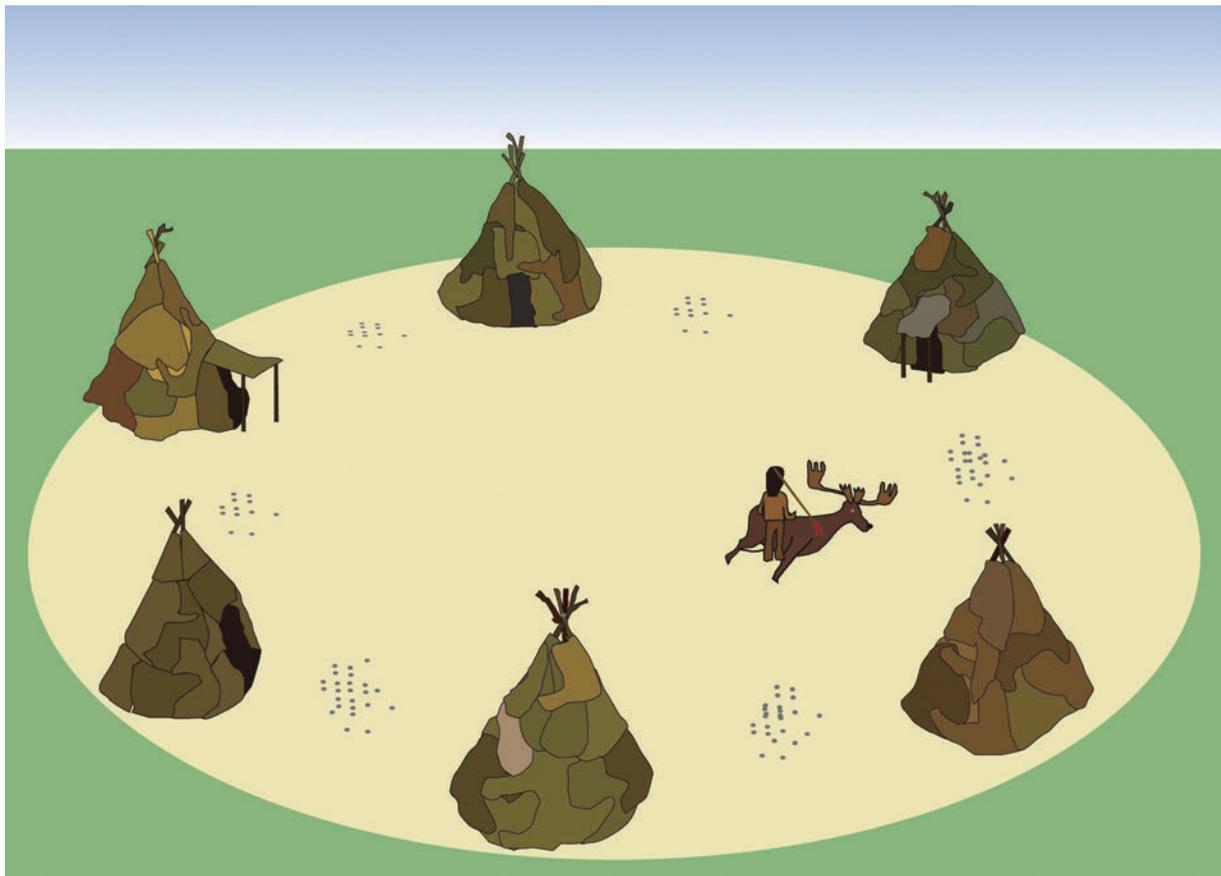
獲得した食料はどのようにして食べたのでしょうか?発掘調査によって火を焚いた跡を検出することがあります。その中には風よけのため石で囲った石囲い炉もあります。棒に肉や魚を刺して焼いて食べたり、燻製や干し肉を作ったと考えられます。また、遺跡では焼けた礫がまとまって出土することがあります。こうした礫は焚火たきびで熱した後に皮などでできた容器の中に入れお湯を沸かし煮込んだり、焼け石の上に木の葉にくるんだ肉や魚を



第10図 大阪府はさみ山遺跡梨田地点の住居復元図
(伊藤慎司、一瀬和夫 作図)
(大阪文化財センター1990)



第11図 群馬県下舐牛伏遺跡の環状ブロック
(群馬県埋蔵調査事業団1986)



第12図 旧石器時代のムラの復元図

載せ、土をかぶせて蒸し焼きにした跡と考えられています。

③ 住

映画やマンガなどでは、旧石器時代人は洞窟に住む様子が描かれています。皆さんの住まれている地域に自然の洞窟があるでしょうか？どこにでもある地形ではありませんので、旧石器時代人は簡単な移動式テントを建てて住んでいたと考えられます。地面を大きく掘削することなどがなかったため建物跡はめったに見つかりませんが、大阪府のはさみ山遺跡梨田地点からは、住居跡と考えられる遺構が見つっています(第10図)。ちなみに梨田地点という名称は、元近鉄バファローズ監督の梨田昌孝さんの自宅建設予定地で見つかったことにちなんで名づけられています。

後期旧石器時代前半に、石器が集中して出土する部分(集中部、ブロック)が広場を囲んで円形に分布する(環状ブロック)があります(第11図)。東日本では多く発見されていますが、西日本では2, 3例しか類例がありません。これは中央の広場の周りにテント式の住居が建てられ、複数の家族からなるムラを形成していた証拠と解釈されています(第12図)。

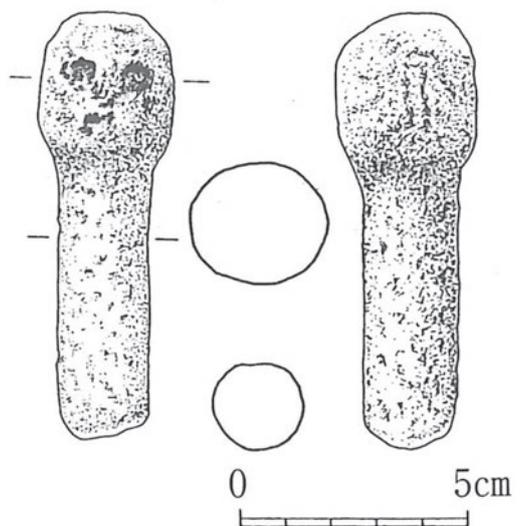
④ 祈りと芸術

旧人以降の人類は、死者を埋葬するようになります。日本では後期旧石器時代前半の事例はありませんが、後半のはさみ山遺跡梨田地点や北海道湯の里4遺跡で石器(石刃)や玉などの副葬品を伴ったお墓と考えられる^{どこう}土壇が見つっています。貴重なものを死者とともに葬ることは、死者への哀悼の意味や死後の世界の概念などが生じていた証拠と考えられます。

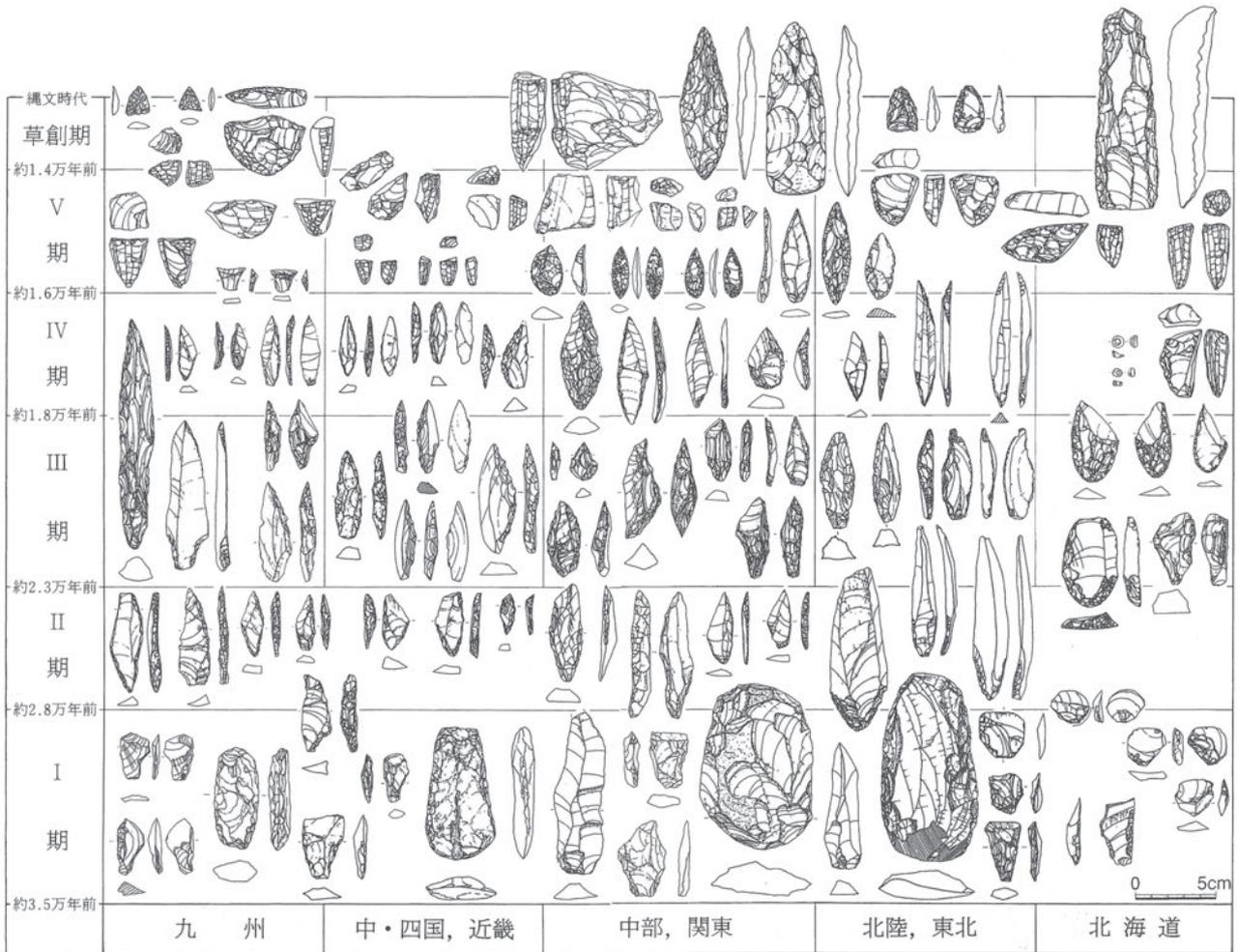
後期旧石器時代のヨーロッパでは、マンモスの牙などで人形が作られるようになります。多くは女性像や動物の形をしています。ドイツのホーレン・シュタ



第13図 ホーレン・シュタインシュタッデル遺跡のライオンマン
(旧石器時代辞典から引用)



第14図 大分県岩戸遺跡のコケシ形石製品
(東北大学考古学研究会1978)



第15図 日本列島の後期旧石器編年(小菅1999)

インシュタッデル遺跡から頭がライオンで体が人の像が出土しており、空想上の動物も現れるようになります(第13図)。日本では大分県岩戸遺跡でこけし形の石製品が出土しています(第14図)。

これもまたヨーロッパの事例ですが、日本の後期旧石器時代前半と同じ時期に、鳥の骨で作ったフルートが出土しています。フルートには音階を変える複数の穴が開いており、曲を奏でていたことが分かります。日本列島に住んでいた旧石器人たちも音楽を楽しんでいたかもしれません。

5 最初の後期旧石器文化

旧石器時代人の道具には骨や牙、木などを用いた石器以外の道具もありましたが、残されていないことが多く、石器が主な研究対象となります。旧石器時代の研究では、石器の種類組み合わせ(組成)や作り方の特徴(技法)などを文化として研究対象としています。

日本列島における最初の後期旧石器文化は、約3万8千年前ごろに始まります。石器には台形石器や刃部磨製石斧が含まれることが一般的です。台形石器は槍先につけて狩猟具として利用されていました。刃部磨製石斧は刃の部分を中心に磨いた石の斧で、樹木の伐採などに用いられた道具と考えられています。磨いて刃を作る技術は、日本の刃部磨製石斧がアジアで最も古い事例ですが、オーストラリア大陸では6万年前以前から使用していました。石斧ではありませんが、同じ時代の朝鮮半島でも石を磨く技術を持っていました。日本の刃部磨製石斧は後期旧石器時代後半には見られなくなります。

台形石器などの鋭い刃が必要な石器をイメージ通りに作るには、鋭利な縁辺が作れるよう意図したとおりに割れる石材が必要となります。石器に適した石材のない地域では、遠方から入手しなければいけません。後期旧石器時代前半には、本州と陸続きでなかった伊豆七島の^{こうづ}神津島産の黒曜石が静岡県まで運ばれていたことが分かっています。海を渡る危険を冒しても黒曜石が欲しかったのでしょう。近畿地域では奈良県と大阪府境にある二上山周辺で採取されるサヌカイトと呼ばれる石材が多く用いられています。

後期旧石器時代前半期の遺跡は台形石器や石斧を含むことも多いのですが、ほかの様相を示す石器群も検出されており、一番初めに日本列島に来た人々がどのような石器文化を持っていたかについては今後の研究の進展が不可欠です。本セミナーで取り上げます福知山市稚児野遺跡、京丹後市上野遺跡の発掘調査はこれまで空白地帯であった京都府北部の調査事例を増やしたのみならず、日本に来た最初の現生人類の文化を解くカギになると思われれます。

参考文献およびサイト

旧石器文化談話会編2021『旧石器考古学辞典』（四訂版）学生社

京都府ホームページ内「京都府レッドデータブック2015」（主に高原光氏執筆分）

小菅将夫1999「地域性の出現とナイフ形石器文化」『岩宿発掘50年の成果と今後の展望』（予稿集）

笠懸町教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会

日本第四紀学会ほか編1992『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版

松藤和人・門田誠一編著2010『よくわかる考古学』ミネルヴァ書房

C.J.Bae et al On the origin of modern humans: Asian perspectives. Science vol .358 no. 6368 (2017).

G.ボジンスキー/小野昭訳1991『ゲナスドルフー氷河時代狩猟民の世界』六興出版

メモ

海を臨む遺跡

京丹後市上野遺跡の発掘調査

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
面 将道

はじめに

上野遺跡は京丹後市丹後町上野にある遺跡です。平成27年度から当調査研究センターが発掘調査を行っています。令和元年度の調査で、約3万6千年前のチャートと呼ばれる石を打ち欠いて作った石器(写真2)を発見しました。

1. 立地と環境(第1図)

景勝地丹後松島の一角を占める犬ヶ岬から上野遺跡一帯をみると台地が続いていることがわかります。この地形は、海岸段丘と呼ばれる地形で、遠浅だった海岸が約12万年前に隆起して現在の姿になったと考えられます。このような地形は、川や海といった水害のおそれがある低地から離れているため、人々が生活しやすい環境であったと言えます。

2. 上野遺跡の堆積環境

上野遺跡は約12万年前から陸地となっており、その後調査地点は、空中にあるチリやホコリ、あるいは黄砂などのごく細かな砂粒などが少しずつではありますが堆積を続け、現在の状況になっています。このなかには、火山が噴き出すときに生まれる極細かな鉱物やガラス片からなる火山灰も含まれています。この火山灰に含まれているガラス片は、噴火した山や時期によって異なった特徴があります。これは上野遺跡で出土した石器の年代を決めるうえで非常に重要です。上野遺跡では、鳥取県にある^{だいせん}大山が約6万年前に噴火した際に噴き上げた火山灰からなる大山倉吉軽石(DKP)層や、約3万年前の鹿児島湾にあったカルデラの大噴火で日本中に降り注いだ^{あいらたんざわ}始良丹沢火山灰(AT)層が年代決定の決め手となりました。

石器はDKP層とAT層の間にある粘土のような粘り気の強い^{こどじょう}古土壤と呼ばれる土から出土しました。この古土壤は、台地の上に降り積もった極細かな粒子が、長い年月をかけ

て変化したものです。古土壌をよくみると、赤い部分と黄色い部分に分けることができます。この色の変化は、地球の寒暖の差を示しており、暖かい時期は赤い色に寒い時期は黄色くなることが分かっています。

地球は暖かい時期(間氷期)と寒い時期(氷期)を数万年ごとに繰り返していることが知られています。石器は、地球全体がよく冷え込んだ最終氷期最盛期(LGM)と呼ばれる頃にできた黄色い土と、現代の気候に繋がるやや暖かい時期にできた赤い土のちょうど境目のあたりから出土しています。

3. 上野遺跡の石器

石器というどのようなものを思い描くでしょうか？上野遺跡では、台形石器や鋸齒縁^{きょしえん}石器と呼ばれる道具が出土しています。台形石器は主に動物などを狩るために、鋸齒縁石器は捕らえた動物の解体などに用いられたと考えられています。また、道具を作るためには石を思った形に割る必要があります。石を割った際に生じる細かな石片や使わなかった破片(剥片など)、割り残した比較的大きな石(石核など)も道具と一緒に出土しています。これらの石器は、上野遺跡で作っていたのでしょうか？それとも、たまたまその場に置き忘れてしまったものなのでしょうか？

4. 旧石器時代の人々の痕跡

日本列島で見つかる後期旧石器時代の遺跡では、他の時代のように地面を掘って柱を立てた建物跡などの遺構が見つかることはあまりありません。この時代の遺跡では、石器がどのように出土するかが当時の様子を復元する上で重要となります。石を割ると足元に散らばります。つまり、石器のまとまりが見えればその場で石器を作っていた証拠になります。調査では親指程度の大きさしかない石器を1点ずつ出土地点と深さを測量し、どのように出土したのかを記録し、石器の分布図を作ります。分布図を見てみると、石器が限られた範囲にまとまっていることがわかります。出土した石器の内容と合わせて考えると、やはり上野遺跡で石器を作っていたと考えて問題なさそうです。

今回の調査で出土した石器は、150点ほどで点数としては少ない割に、道具として使われたと考えられる石器が多いことが特徴として挙げられます。このことから、旧石器時代の人びとが上野遺跡に長く滞在していたというよりも、狩りなどのために一時的にとどまっていたといえるでしょう。

5. 石はどこから運ばれてきたのでしょうか？

出土した石器に使われている石材は主にチャート・鉄石英の2種類の石です。そのほか、黄褐色の玉髓ぎよくずいや軟質りゅうもんの流紋岩こくよう、黒曜岩（黒曜石）もわずかではありますが出土しています。このうち、玉髓や軟質の流紋岩、鉄石英は火山によって生み出される岩石で、近くに温泉のあるような地域でよく見ることができます。上野遺跡の対岸には宇川温泉があることから、遺跡の周辺の川や海岸などで拾うことができたのでしょう。さきほどの3つの石材とは異なり、チャートや黒曜岩は遺跡の周りには存在しないことから、どこからか旧石器時代の人々が運び込んだと考えられます。

6. 石材の移動から旅路を読む

チャートは、丹波帯とよばれる地帯に広く分布しており、上野遺跡周辺では網野町の五色浜付近（陸路約30km）や宮津市の岩滝口のあたり（陸路約35km）でチャートを今でも拾うことができます。しかし、黒曜岩はガラス質のマグマが急速に冷え固まったもので、日本列島内でもごく限られた地域でしか拾うことができません。上野遺跡では、黒曜岩に含まれている成分の分析から、島根県沖にある隠岐群島おき（海上距離150km）で拾うことのできる黒曜岩であることがわかっています。これらのことから、日本海沿岸地域を渡り歩く際にどこかで手に入れ、上野遺跡でキャンプを営んでいたことが想像できます。少し時代が新しくなりますが、福井県から石川県の日本海沿岸地域にも旧石器時代の遺跡があることから、上野遺跡に石器を残した人々は北を目指して移動していたのかもしれませんが。

7. どうやって石器をつくった？

上野遺跡から出土した槍先として利用された台形石器は、後期旧石器時代のシンボルとされる狩りの道具として使われた槍先の形に似たナイフ形石器とは形の上で異なった印象を受けます。ナイフ形石器はどれも似たような形をしています。これは一定のルールに従って規則的に石を割ることによってできた破片を使っているためです。石は種類によって硬さや割れ方に特徴があるため、形は似てはいますが、日本列島の地域ごとに色々な割り方のルールが存在していることが分かっています。

一方、上野遺跡の台形石器の割り方はどうでしょうか？まず、石器に残された加工の痕を見てみましょう。この石器はやや幅広の形の破片を使ったものです。一見すると普通の石の破片にしか見えませんが、よく見てみると、やや幅が狭い部分の縁に細かな剥離が確認できます。これは、柄などを装着する部分を作り出しているのです。このような加工はナイフ形石器にも見られることから、台形石器はナイフ形石器と似たような機能をもっていたことが想像できます。

次に、素材となった石の破片と破片を取り終わったあとの石について見てみましょう。上野遺跡で出土している石の破片はどれも寸詰まりで小さなものばかりです。また、破片を取り終わったあとの石は、サイコロのような形になっています。先ほど、ナイフ形石器の作り方について少し述べましたが、決まった形の石の破片を作り出すにはきちんとした手順を踏んで割らなければ、狙った形の破片にはなりません。つまり、決まった形の破片をはがし終わった石も破片と同様に決まった形にならなければなりません。ですが、上野遺跡で出土している石の破片は、寸詰まりで小さいということぐらいしか共通点がありません。また、破片を取った石も色々な方向から叩かれている痕跡に覆いつくされています。つまり、上野遺跡で石器を作った人々は、決まった手順で同じような石の破片を作り出すことを狙っていないことがわかります。どちらかといえば、手持ちの石をとにかく割って、破片の中から使えそうなものを拾いだすという極めて刹那的な石器の作り方をしているといえます。

おわりにかえて

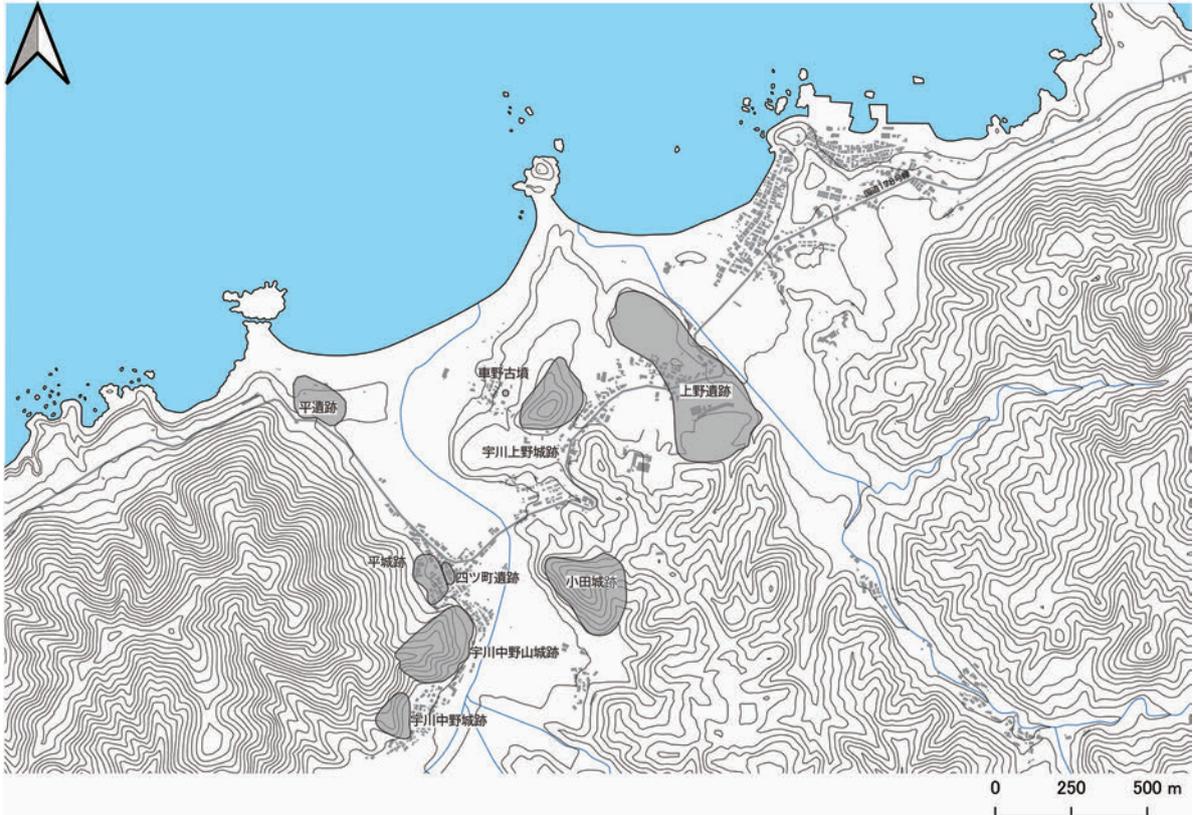
上野遺跡の発掘調査によって、日本国内では類例の少ない後期旧石器時代前半期の海岸段丘上に立地する遺跡の資料を得ることができました。また、小さな破片ではありますが、隠岐群島の黒曜岩が出土したことにより、今までに想定されていたよりも山陰地方から丹後地域にかけての広い範囲で人々が移動していたことがわかりました。石器の作り方については、少なくとも決まった形の石の破片を作り出す、ナイフ形石器を作る技術とは異なることが指摘できます。作り方の違いがそのまま時期差になるかといえば、難しいところですが、上野遺跡の石器作りはやや古い技術にあるように思われます。しかし、ナイフ形石器と上野遺跡のような石器が同時に存在する例も報告されていることから、今後、近畿地方のみならず同時期の遺跡と比較検討し、上野遺跡の実態により迫っていく必要があるでしょう。

参考文献

旧石器文化談話会2007 『旧石器考古学辞典』 学生社

堤隆2009 「旧石器時代ガイドブック」『シリーズ「遺跡に学ぶ」別冊』 新泉社

稲田孝司・佐藤宏之(編)2010 「旧石器時代(上)・(下)」『講座日本の考古学』1・2 青木書店



第1図 上野遺跡の位置(1/25,000 国土地理院基盤情報より作成)



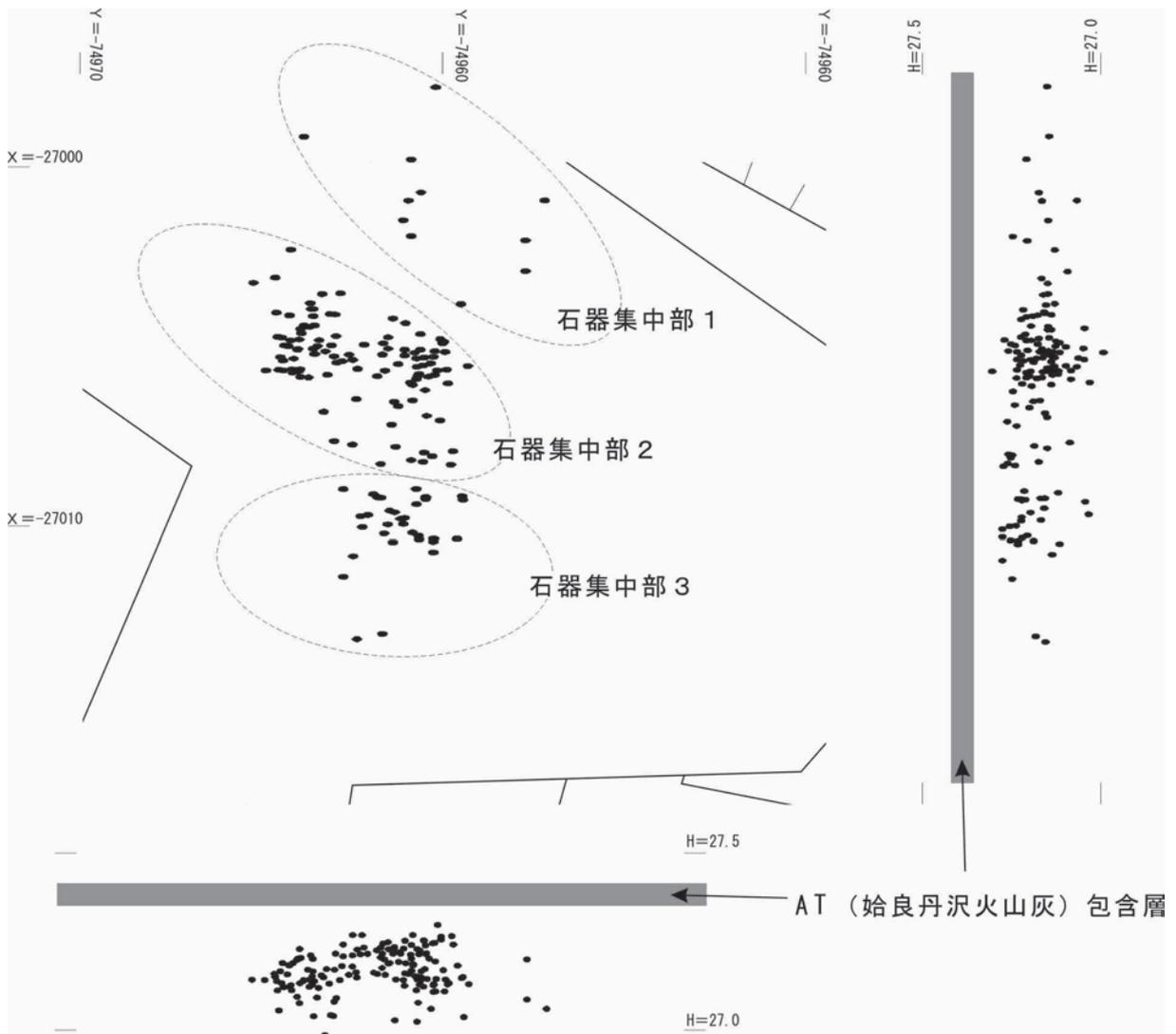
第2図 上野遺跡トレンチ配置図



写真1 石器の出土状況



写真2 チャート製の石器



第3図 石器分布図

台地の遺跡

福知山市稚児野遺跡の発掘調査

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

黒坪一樹

1. 発掘の経緯

稚児野遺跡は、国道9号線の改良工事に先立つ調査で見つかりました。もともと、縄文時代から平安時代の遺物散布地として知られていました。そして令和元年度から始まった発掘調査で、およそ1,200点の石器が出土し、稚児野遺跡は約3万年以上前の後期旧石器時代前半期のムラ・キャンプ地であることがわかりました。

2. 遺跡の立地

稚児野遺跡は、丹波山地の北端に位置し、小高い台地上に位置し、周囲を山に囲まれています。全国的に旧石器時代の遺跡はこうした小高い台地上にあります。そして、日本海側の丹後地域や但馬地域にも近く、いわば内陸部と海浜部の中継地点にあります。

3. 地層について

地面を掘り下げた結果、石器は地表面から約50cm下の黄褐色土から出土しました。この層のすぐ上は、約3万年前に噴火した始良丹沢火山灰(AT)層を含む暗褐色土です。これにより石器の年代が今から3万年以上前とわかったのです。さらに下層で、上野遺跡でも確認された大山倉吉軽石(DKP)層も確認できました。

4. 石器の種類と石材

約1,200点の石器には、道具として使用されたものと、石器作りの際に出た大小の破片(石くず)があります。道具として完成した石器は十数点です。道具としての石器には、狩猟のため槍先に使用されたナイフ形石器、木や動物の肉などを加工するための刃物類(削器・搔器)、伐採具である刃部磨製石斧などがあります。ナイフ形石器は3点あり、これらは北関東地方や東北から北陸地方の影響がうかがえるものです。刃部磨製石斧とは、先端の刃部のみを磨いた斧形石器です。3万年より時代に出土する石器の代表格です。木



写真1 石器の出土状況

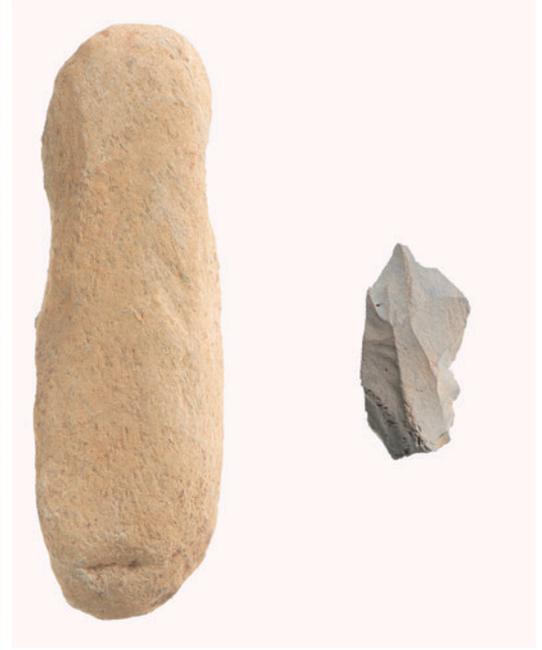


写真2 刃部磨製石斧(左)とナイフ形石器

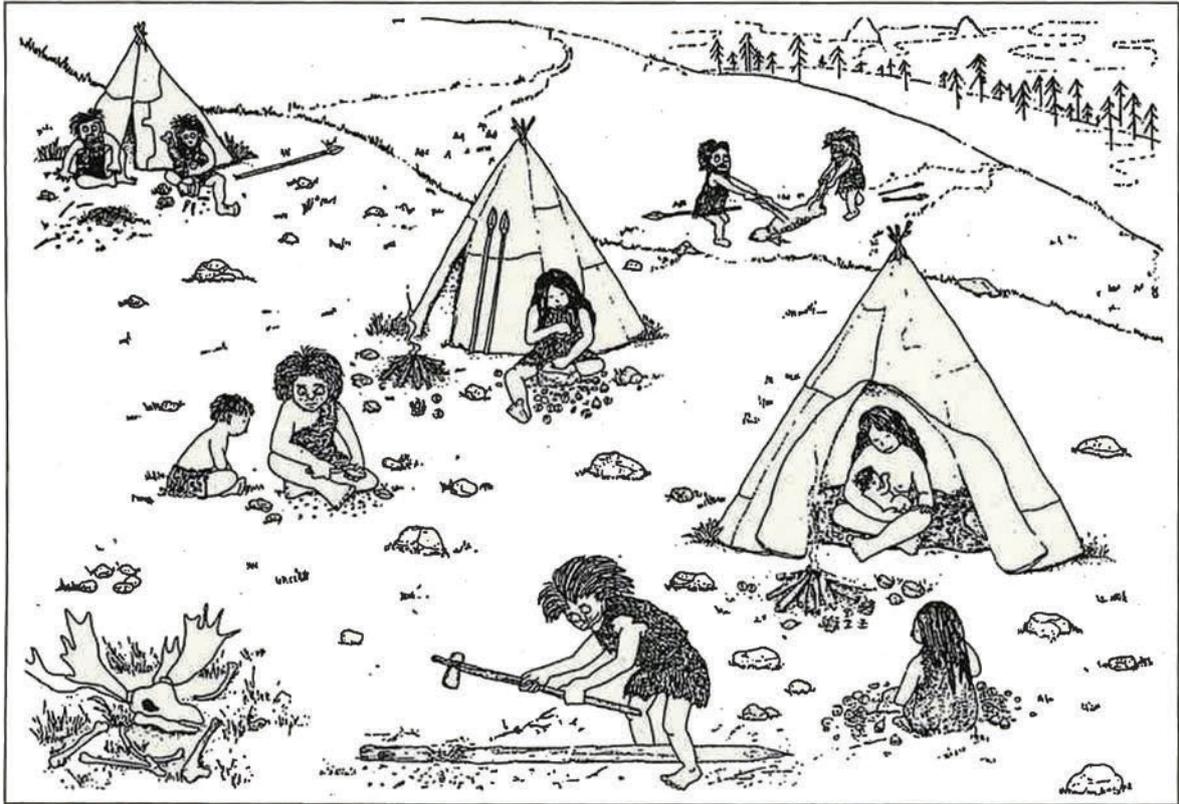
の伐採の他、動物の解体などに用いられました。

石器の使用石材には、サヌカイト、チャート、シルト岩、花崗岩、砂岩、黒曜石があります。サヌカイトと黒曜石は産地がそれぞれ二上山と隠岐島、非常に遠い所から運ばれています。これらがもたらされたルートとして、瀬戸内海と日本海を低い分水嶺で結ぶ氷上回廊が考えられます。

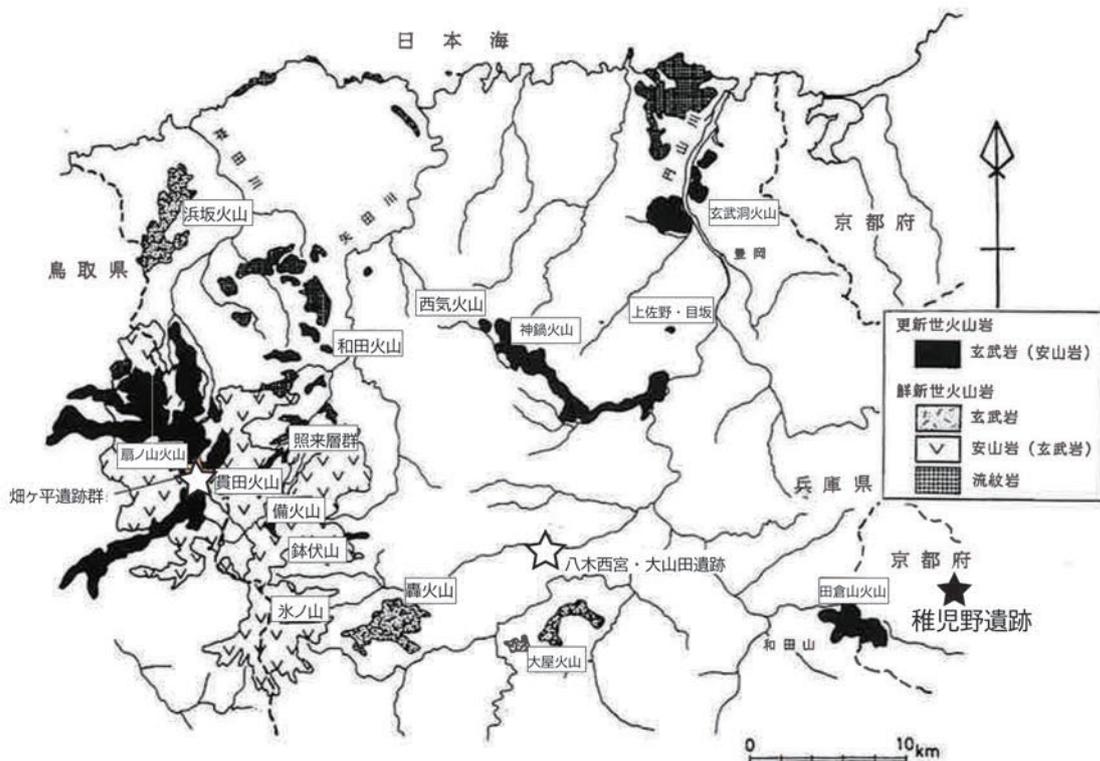
5. 石器の分布～生活の解明に向けて

石器は、調査地全体に同じ密度で分布しているわけではありません。石器がまとまって分布する範囲を集中部(ブロック)といい、そうしたブロックが9か所見つけられました。ブロックとは石器づくりのために打ち割られ、飛び散った破片が集中する範囲を指します。石器を作った場所であると考えられています。

今後、これら大小の多数の石器片を接合関係を調べる作業はとても重要です。石器の接合関係が頻繁に認められれば、9か所のうちのどれが同時に存在していたかを推察できます。仮に1集中部1家族として、同時に営まれた集中部の数がわかれば、1家族4～5人としておよそ何人くらいのムラ・キャンプ跡なのかわかってきます。さらに、テント状のものとされる住居や、食糧の調理場(火処)の設定も大きな課題です。今回の発掘調査は、3万年前の旧石器時代社会を読み解くための貴重な発見といえます。



第1図 旧石器時代の集落生活の想像部(鈴木忠司編1982『野沢遺跡』より転載)



第2図 兵庫県北部の鮮新世～更新世火山岩類の分布と旧石器時代遺跡

(山口卓也2021『兵庫考古』第18号掲載図に加筆)

座談会 メモ



第 147 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 3 年 11 月 27 日 (土)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189

